

年次報告書才一第

つみあげ

1973



兵庫県自然教室実行委員会編

"つみあげ"の刊行に際して

公害が日本列島を虫ばみ、これに拍車をかけるように列島改造論が開発の名によせて、豊かな自然環境を次々と破壊しそのとどまるどころを知らない。

都会やその周辺から自然をうばい、その調和を攪乱し続けている現状では、自然を誤解し、あなどり、灰色の人工社会こそ当然の自然環境としかみない子どもたちが何と多く育っていることが。

そんな中で、わたしたちは自然教室を实践してきた。ささやかではあるが、すぐにできそうなことからはじめてきた。ひとりでも多くの子どもたちが、少して

も自然に接する機会が得られるようにと願ってがんばってきた。

この年次報告書"つみあげ"は、このような自然教室の实践記録です。自然教室にとって、これという指南書はありません。全国でも、ごくわずかの有志が実践をはじめたばかりなのです。それだけに、ひとつひとつの实践が大切な意味をもち、その積みあげにより、さらにその上にあたらしいステップをふんで行かねばなりません。年次報告書の"つみあげ"は、そういう意味なのです。

目 次

兵庫県自然教室の考え方 ----- 2

音楽隊の記録 ----- 7

美方町のあらまし ----- 11

第1回みかた自然教室 ----- 15

毎月の自然教室へ ----- 20

第2回みかた自然教室 ----- 24

5地区にわかれた自然教室 ----- 40

年表 ----- 4・14・21・25

1. 前提（行動の指針）

本来、子ども達の周辺には、豊かな自然のある生活環境が保障されて当然であり、精神発達上、必要かつ欠くべからざるものとする。

2. 環境権

子どもにとって、豊かな自然のある生活環境を保障されることは、権利である。われわれは、自らの限界を努力によって拡大しながら、ひとりでも多くの子ども達にその機会が与えられるよう計らねばならない。

3. 自然の保護

子ども達にとっては、自然が残り、さらに回復してこそ将来に希望がつけ、夢をたくすことができる。自然が、今以上に破壊されずに残り、また自然の回復能力の限界を超えるような行為に対して、厳しく批判し、その保存を要求するものである。また、自然に接する方法が、決して自然を損うものであってはならない。

4. 指導者

自然教室の指導者は、自然のしくみを理解し、その保護を進んで実践しなければならない。同時に、子どもの認識過程をつかむ眼を確かなものにしなければならない。また、子ども達の権利と人権を守るため、どのように手がかりかろうとも、その努力を惜しんでならない。

5. 学校教育に対する配慮

子ども達にとって、学校教育の与える影響は重大である。文部省のカリキュラムに対して、自然のしくみをその保護の精神にのっとり理解させていけるよう配慮を加え、自然に接する機会がより多く与えられるよう改善の要求をしていかなければならない。

解 説

私達の自然教室は決して奉仕活動ではない。子ども達はもちろんのこと、私達もまた、豊かな自然環境を保障され、それは憲法でいう最低限度の生活水準に含まれるものと思う。為政者が(県や市)、私達に対し豊かな自然のある生活環境の保障を義務として負うのは当然であると思う。ところが、為政者がその責務を実行しない現状において、私達は特に取り残されつつある子ども達を放置しておくわけにはいかなかった。

ところで、自然教室の考え方の示す

ところは価値感の転換ともいえる。人間を自然と対立するものと考えず、自然の中の一員として、その保護を第一義に考え、自然のしくみをこわすことなく、人間の幸せを考えねばならない。例えば、自然を元金とすればその利子で私達は生きていけるともいえる。しかし、元金の自然を破壊してはどうにもならない。子ども達はもちろん、私達の身のまわりに豊かな自然のある生活環境が残され、また回復するよう働きかけるだけの努力を払っていかねばならない。

実 行 委 員

- | | | | |
|---------------|-------|--------|--------------------|
| (078)741-2534 | 稲尾 豊 | 654 | 須磨区妙法寺字榎原1282-3 |
| (0797)32-1767 | 角中 透 | 659 | 芦屋市大東町13-12 大東荘210 |
| (0797)61-0895 | 川畑 啓一 | 669-11 | 西宮市塩瀬町名塩2800 |
| (0792)54-1315 | 工 義尚 | 671-01 | 姫路市大塩町2196-7 |
| (078)732-0252 | 谷口 博次 | 654 | 須磨区養老町1丁目28-21 |
| | 戸田 耿介 | 658 | 東灘区田中町4丁目9-6 |
| (078)231-2900 | 橋本 敏明 | 651 | 葎台区中島通3丁目20-1 翠明寮 |
| (078)732-2995 | 平井 元明 | 654 | 須磨区大手町2丁目10-3 |
| (0797)22-5054 | 村田 俊一 | 659 | 芦屋市大東町8-5-315 |
| (078)341-9494 | 山田 利行 | 652 | 兵庫区馬場町35-2 |

年表 (1)

極端に言えば、人間が存在すれば、そこに自然破壊は生じてくるともいえる。自然の破壊は、古代、人間が農業をいとなむようになった頃まで「もさかのぼること」ができるが、それはともかく、農業の技術が進み、工業の近代化が進むにつれて、自然の破壊は続けられてきた。明治の初め、村田鋏が完成し多くのエゾシカを殺した。またその半ばには、日本中に鉄道がひかれ、人類の未踏の地まで自然破壊は進行していった。この頃、一部の学者や愛好家が保護を訴えたり、野鳥の会なども結成されたりしたが、当時の自然破壊は、一般の人々の認識をうながすほどに深刻ではなかった。

戦後、尾瀬に電力ダムがつけられるという計画があって反対運動がおきた。これを契機として、全国各地の自然破壊を調べようと、1951年(昭26)に、日本自然保護協会が結成された。しかし、戦後の経済成長は世界に例もなく急速に進み、自然の破壊は目にみえてひどくなったにもかかわらず、なおも日本の自然保護運動は、どちらかと言えば、学者と愛好家を中心とする日本自然保護協会だけであった。ところが、ごく最近の水俣病をはじめとする公害病が世に明らかになってからは、環境の問題として、各地に公害の住民団体や自然保護団体が結成され、やがては全国自然保護連合の結成、環境庁の設置、国連人間環境会議と世論の注目をあびるまでに至った。

(1970. 3 「人類の進歩と調和」をテーマに、日本万国博が開かれる。
(7 東京に、全国初の光化学スモッグが発生。)

I. ことの始まり

全国的に自然保護運動が盛りあがって
きたのは、尾瀬の道路問題が起き、大石

環境庁長官がさし配をふるった2年前の
:1971年(昭46)ぐらからであった
が、その4~5年前からもすでに各地で
くすぶりかけていた。自然保護教育の動

たこともあった。1956年(昭31)に発足した神奈川県三浦半島自然保護の会(代表・金田平)をはじめとして、山規模であったり、単発であったりしながら、各地の自然保護団体や大学生などのグループが自然保護教育の実践を試みている。しかし、それら個々については、自然観察会などの名をもって割に数多くなされているにもかかわらず、単なる行事の消化に終していることも無視できなかった。着実に成果をつみあげているのは、三浦半島自然保護の会などごくわずかであった。自然保護運動の盛りあがりに対して、自然に興味を持つ人達だけの観察会があいかわず繰り返されていった。

一方、子ども達周辺からは自然がどんどん失われ、かわって光化学スモッグという奇妙な現象も現われた。子どもにとっては「今」が大切なのであって、その成長過程に豊かな自然に恵まれず、絶えず公害の町で生活するとすればどうなるのだろうかと思えば「まん」ならなかった。おとなが言うように、たとえ10年や20年の計画で自然を回復させようとしても、その間に子どもはおとなになってしまう。生命の尊さ

や自然の大切さを知らずして成長すること、老婆心かもしれないが少なからず不安をいだいた。そして、私達は、自然保護教育の意味そのものよりも、とにかく自然に接する機会を与えようと考えた。

1971年(昭46)6月5日、朝日新聞の「声」欄にこんな投書がのっていた。「兵庫の北海道と呼ばれる小さな寒村ですが、できるだけの準備をしてみましよう。50人ぐらいは受け入れられそうです。山陰線八鹿駅からバスで1時間30分、徒歩10分くらいで着くところです。山にはキャンプの適地があり、テントなどの用意はできるし、宿泊希望には農家でも世話します。今のところ交換条件は考えていません。都会の子どもたちを喜ばせたのでです。ご希望の方は、川代(おじろ)局<079697>148番へ電話して下さい」=兵庫県美方郡美方町貫田(ぬきだ)田村利雄(農業)これは、吹田市の酒井喜美子さんという主婦が、都会の子を自分の田舎へ連れて帰って大変喜ばれ、次もまた希望する子どもを連れていきたいという1週間程前の投書に共感したものだ。

その3週間後の6月27日。はじめて田村さんに電話をした。その翌日に手紙を書き、さっそく兵庫県自然保護協会や日本自然保護協会の会員に呼びかけて自然保護教育実践グループをつくり、計画を練り始めた。

はじめて現地美方町を訪れたのは7月9日の夜だった。驚いたことに、ブルドーザーで山をけずり、約2千平方メートルの広場をつくっていた。「都会の子には広場がいるだろう。山の急斜面にあるこの部落にはそれがない。すぐに役場にかけてあって作った」と言う。しまった！私達は田舎の持つそのままの味を、自然のそのままの姿を見せたかった。広場はもちろん、わざわざ特別なことはして欲しくはなかった。だが、地元の身になって思えば、誠心誠意これから来るであろう子ども達のためにとってなされたのだろう。むしろ、その心に感謝して当然のことであつたのかもしれない。

はじめて田村さん（^{ぬきた}貴田地区、区長）の家に着いたときは夜も9時前であつたが、突然縁側の障子に勢いよくぶつかるものがあった。明りに飛んできたカブト

ムシだった。すばらしい！家の中にツバメの巣があり、縁からの眺めは正面に千メートル級の尾根が連らなり、眼下には時に鉄砲水となって流れる矢田川を見ることができた。自然教室にとって、特別な事物や天然記念物などは必要なく、どこにでもあるというような自然で充分だった。それよりもはるかに大切なことは、その自然の中でどれだけ長く生活できるかであり、また豊かな自然の中で育ってきた地元の人々とふれあい、言葉をおかわすことであると考えていた。私達は子ども頃、しばしば自然の不思議さに驚かされ、大きな感動を覚え、いわゆる精神発達の過程においてかけがえのない原体験を得てきた。それは、いのちの尊さを教えてくれ、自然や人間に深い愛情をつちかわせてくれた。広場やキャンプ場はそれらを助ける二次的手段であるだけに、そのために自然がこわされては、元も子もない。

地元の受入れ態勢は急速に進み、私達の準備をはるかに上回るものだった。議論よりも実践によって多くの事例をつくるのが大切だと始めたのだが、子ども

を集めることはなかなかむずかしかった。長田区のある住宅ビルに行ったとき「私は昔、学校の教師をしていたの。私の学生の頃は、よくこんな事を論文にしてたわ。どうせあなた方もそのつもりなんでしょう」と、あっさり断わられた。兵庫県自然保護協会の名刺を差し出したとき「こんなものはどうにでも作れるんですよ」と、ストレートに言われこの句が出なかった。しかし、協会の理事の紹介で長田区南部の自治会に行ったとき、2人の応募があった。けれども、2人ではどうにもならない。「趣旨もけっこうだし1週間6千円とは安いのだが、親元から1週間も離れそうとする人が少ない」と言うのが、二この人の弁であった。しかた

なく、子どもを集めることはあきらめた。が、どうしても美方のあの熱のこもった受入れに答えるために何らかの形で実施しなければならぬと思った。そこで、和歌山の高野山へ合宿する予定であった神戸市内の2つの中学校の吹奏楽部が協力しても良いということになった。「演奏旅行」という名目で、私達の計画に乗ろうというものだった。「自然を理解してこそ、音楽も良いものができる」という田尻先生の話しだった。それが決つたのは7月23日。あとは夢中で、準備に打ち合わせに追われ、どうにかこうにか実施にこぎつけたというのが、いつわりのないところだった。

音楽隊の記録

1971年(昭46)8月27日から29日まで行なわれた「演奏旅行」という名の自然教室に参加したのは、神戸市立木田中学校吹奏楽部および同駒ヶ林中学校吹奏楽部とバトン部の55名。引率教師9名。自然保護教育実践グループからは、兵庫県自然保護協会の川畑啓一、

平井元明、東条利文、山田利行、日本自然保護協会関西支部の加畑兼四郎、山田清子、和歌山大学自然保護の会の杉山敬三、田中みち代、中川千尋の9名であった。お世話いただいた農家は14軒であった。中学生の参加費は2500円。そのうち500円は「演奏旅行」に対する

補助。また別の500円は郵費でまかな
い個人負担は1500円だった。宿泊先
の農家へは3日間で1500円のお礼を
した。期間中は大変残暑がきびしく今夏
の最高気温がでるというくらいであった。
《作文から》

3年 西光利子

おいしい空気。山に囲まれた町。私は
遊ぶことばかり考えた。2日目の朝、小
代小学校を見たとき、なぜか私の描いて
いたものがこわれていくような気がした。
それは私達の学校よりも美しくてきれい
で、規模が大きいからだ。パレードのと
き、神戸よりはずっとせまい町なのに、
とつてもつかれた。それは緊張していた
からかもしれない。昼食の後、川に行っ
たときの冷たくきれいな水が何よりも印
象に残った。その夜、山で行なわれたフ
ァイアー。中1の時にしたより少しもの
たりなかったけど、なぜか心にひかれる
ものがあった。楽しい思い出のひとつにな
った。翌日、帰りたくなさそうな顔があ
っちこっちに見え、しぶしぶバスに乗り
込んだ。「さようなら」という声が、つ
ぎからつぎへと聞こえてくる。私は、お

もゆず「また来年もくるよ」と大きな声
で言った。

日当均

8月27日からの3日間。この3日間
は、ぼくにとって、とても有意義で楽し
いものとなった。ふろで飲んだ水。スポン
ジのまま泳いだ川の水。とにかく、水が
一番印象に残った。なにしろ、水がおい
しく冷たい。

向こうの人々は素朴で明るく、とても
気楽にことばがでて、親しみやすかった。
帰ってから、何度か手紙を出したけれど
全部返事が返ってきた。そして、その手
紙には「また来てください」ということ
ばが必ず書いている。これを読むたびに
目に涙をうかべて言ってくれたおばさん
の最後のことばが思い出される。

「また、きゃんせえな……」

3年 梅田和美

兵庫県の北海道といわれる美方地方へ
演奏旅行にいった思い出は、私の胸に深
くきざまれている。今年は、コンクール
に出ずに演奏旅行に力を入れて、夏休み

の練習にもはげんだ。合宿のようなものでもあった。

景色がとてもきれいだった。緑が青々としていて、わりかし大きな川がその緑の中にはいっていった。川にはいってみると、夏だというのに冷たい水だった。美方の小中学生が、毎日こんな所で遊んだり、勉強したりできるのかと思うと、うらやましくなってきた。私たちが泊めてもらったお宅は、おじさんおばさん夫婦に6年生と3年生の女の子。そして、ゆんぱく小僧の幼稚園に行ってる源ちゃんです。源ちゃんは、私たちが行くとすぐ友達になって遊びました。3年生の子とも遊んでいましたが、6年生の瑞穂ちゃんという子は、無口なせいかあまりしゃべりませんでした。でも、手紙は書きました。おじさんは、役場に勤めているので、私たちがパレードをして役場まで行くと、暑そうな私たちを見て、冷たいものをと、電話でおばさんにたのんだという。それを聞いて、2日も泊めていただいたのに、そんな心づかいまでと思い、ありがとうという気持ちでいっぱいでした。村の人の力でキャンプファイアーも

したし、神社での演奏もやったし、楽しいことばかりで書ききれません。神社で演奏していたときは、おじさんがテープに録音を取っていかされたので、自分たちの演奏がどんなだかよくわかった。

こんないっぱい思い出をかかえて、バスに乗りこみました。村の人たちと別れるのがさびしく、目がしらがあつくなるのがわかりました。村のおばさんで、泣いている人がいました。私も、その人を見て、よけりに目がしらがあつくなるのを感じました。

はじめて経験する私産リーダーも農家の人産も大変というよりも、つらい3日間でした。山の斜面にたつ農家を連絡にとれほど行ったり来たりしたことか。打ち合わせのために、午前3時に寝て6時に起きるというきびしい毎日でした。自然教室の意味も内容も、それどころでなく、ただ何とかして無事やりとげようとの思いだけだった。ひとりの指導者もなく、全くの試行錯誤だった。

しかし、その中でもいくつかの成果があった。当初の小中学生が集められなくな

って、対象が中学生になったとき、中学生なら楽だと思っていた。ところが、彼らは現地のようすに慣れると、自由奔放に遊びまわっていた。都会では、もう中学生になったのだからと必要以上に「おとな」であることを強要され、それがおとなのような行動をとると、まだ子どもではないかと叱りつけられる。そして、君たちは、おとなと子どもの間であるという言葉を押しつけられている。

受験と悪化する生活環境の谷間で成長してきた中学生は、この美方の自然の中で、すっかり子どもになりきっていた。過ぎ去った「子どもの時代」に味わえなかった自然を、今「中学生」になって味わっているといえれば大げさになるかもしれないが、少なくとも私達は、もっと小さい頃から自然に接しておくべきではないかという疑問を持った。子どものように遊びまわる中学生を、かわいらしくも思ったが、これでいいのだろうかと考えさせられた。

《美方からの便り》

家に泊った子ども達、喜んで一生忘れる事ができないほど、楽しかったと便り

くれました。私の事のようにうれしく思います。こんな山の奥に住んでいて良かったなあって、つくづく感じました。

また、来年もきっと来てくださいね。お待ち致してます。子ども達をつれて。冬も良いですよ。雪がたくさん降って、スキーが、また楽しい。枯木に雪の花が咲くのも見てもらいたいですね。ぜひ、もう一度おいでくださいませ。

(小林勝治)

自然保護討論会

中学生の帰った29日の午後、貫田公会堂で、「過疎対策と自然保護」をテーマに討論会を行った。討論会には、私達9名の他、貫田のおじさん、おばさん15名、美方町からは森脇勝吉町長、中安富士男町議会議員、中村観光協会長、観光係から井上昌氏、商工会の観光部門の代表として辺見氏が出席。

町長は、自然保護について知らないから自然を破壊するのではなく、生活のためには、自然をある程度を破壊するのもやむを得ないという。また、都会の人は、こんなところへやってきては、自然を残

せと言われるが、ムシがよすぎるのと違いますか、という。しかし、私達は長い眼で計画を考えて欲しい。あとで自然が残っていたらと思っても遅い。何とか自然を残す方向で考えてほしい、というほかしかたがなかった。

美 方 町 の あ ら ま し

美方町は兵庫県の北西にある氷ノ山の北側で、矢田川の上流にあたる純農村である。総面積は約67、6km²で、その約83%が山林におおわれ、階段のような耕地がほとんどで、その間に22地区の集落がちらばっている。現在、人口は約3900人である。

この地の地形は、東・西・南の三方をおよそ1000m前後の山地に囲まれた凹地で、最古は「小代郷」と呼ばれ、藤原氏家来の落人が住みつき、以来、時代が下るにつれ、平家の落武者なども加わって次第に村落の形を整えてきたらしい。

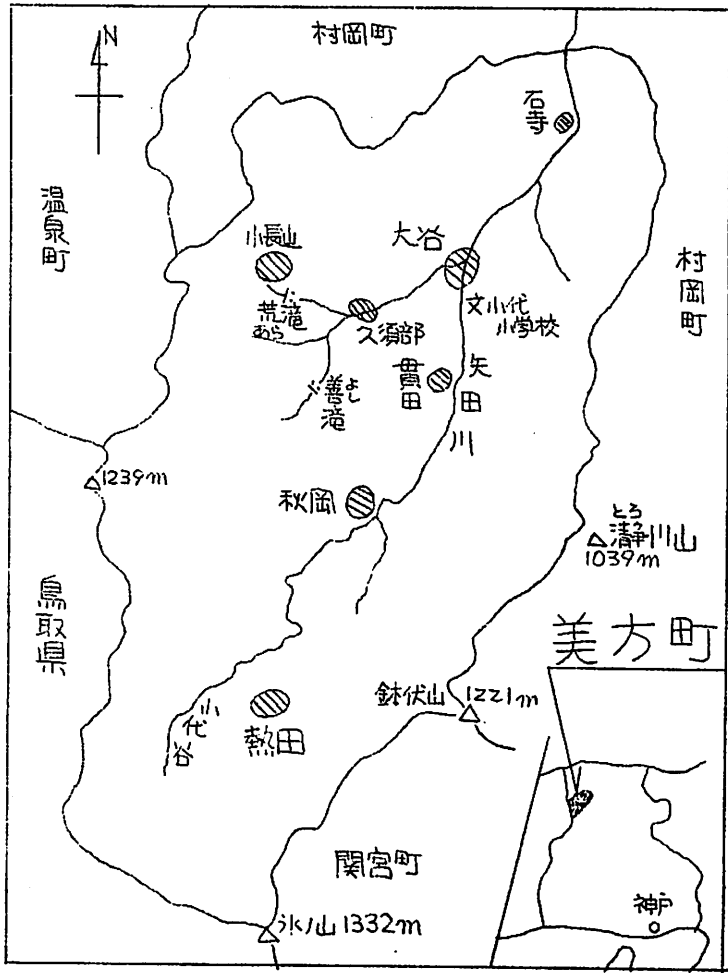
明治21年町村制が施行され「小代村」と名づけられ、昭和30年に町村合併促進法に従って、となりのいそ射添村と合併し「美方町」が誕生した。しかし、事情に

とにかく、この中学生の自然教室も、自然保護討論会も無我夢中だった。田村区長さんは、病人がでなくて良かったと言っていた。計画の変更こそあったが、この自然教室をやったのけた事が、以後の重大な踏み台になったと思う。

より射添村は村岡町に境界変更されて分かれ、旧小代村の姿で美方町として現在に至っている。

気候は、山陰型気候といわれ、年間の降水量は約2300ミリ、熱帯性気候なみである。梅雨・台風・冬期には人々の活動は著しく制約を受け、平均気温は、1月3℃、8月27℃となる。特に冬期には山頂部で2~3mの雪が積もり、農作業など全くできなないので、酒造りや、工場労務など出かせぎにいぎ、生計の大きな助けになっている。

しかし、スキーには県下でも最も良質の雪が多く、古くから小代スキー場などが開発され、今日では、国道9号線の開通や町道の整備など、交通もすたじいによくなって、京阪神間からのスキー客が年



ごとになえつつある。

冬期は出かせぎに行く人約18%もいるが、春から秋にかけては農作物が中心となり、米・いも類・豆類・野菜類などを生産している。また、牧畜もかなりさかんで、牛・にわとりなどを飼育している。特に牛は「但馬牛」として古くから

有名である。

しかし、経済的には貧しく、近年、都会地へ転出する人がふえ、過疎化の波をもろに受けていたが、最近、ようやく落ち着きかけてきたようだ。

美方町の自然は、まだ本格的な科学調査が始められた段階であるが、例え

